構造と主体

―― 山田盛太郎『日本資本主義分析』の変革像と戦後展開素描 ――

後　藤　康　夫

1　山田『分析』における普遍と変革像

バーシェイ『近代日本の社会科学』は，その末尾において結論を，「講座派の遺産」，「宇野と丸山 ― 構造と主体 ―」，「発展的疎外」，これら三点に整理している。この小論では，第一の「講座派の遺産」を切り口に，第二の「構造と主体」に少し立ち入ってみようと思う。

最初に，第一の結論のところを聞いてみよう。

「本書で私は日本のマルクス主義に中枢的な位置を与えてきたが，その日本のマルクス主義のケースをみれば，この点は雄弁に証明される。講座派はその極限において，普遍主義的であると同時に，それとまさに同程度に特殊主義的であった。」(1)

われわれもこうした指摘を念頭に，1934年に刊行された山田盛太郎『日本資本主義分析―日本資本主義における再生産過程把握―』（以下，山田『分析』と略す）の特徴，とくに周知の「世界史的連繋における日本資本主義の構成と転変」について，「再生産論の具体化」として把握する方法が，できるだけ浮き彫りになるように，簡潔に整理してみよう。

そこでは，世界史（歴史の法則）が，とりわけ，その推進力としての生産力が英古典的産業革命を歴史的基盤とする「近代的大工業」という具体的姿において把握され，普遍として位置づけられる。だが，この日本においては，普遍たる近代的大工業は，19世紀後半から帝国主義への古典的転回点たる20世紀初頭にかけて，政治的必要という至上命令のもと，外から・上から強力的に移植・創出される。これをテコに，とくに日清戦争から日露戦争を通して，社会的分業総体が，生産手段生産部門は天皇制軍事機構に埋没，消費資料生産部門は半封建的な地主制に依存，という軍事的ならびに半封建的な特殊構成において整えられるに至る。その意味で，この特殊構成は，近代的大工業の全社会的確立を理論的に総括するマルクス再生産論を，この日本において分析基準とするさいに，なお二つの媒介項を必要とする。すなわち，範疇的には封建制から資本制への移行を総括表示するケネー「経済表」，段階的には自由競争・産業資本から独占資本主義・帝国主義への移行を総括するレーニン『帝国主義論』（ローザ軍需品表式），これら二個が設定されることによって，特殊構成は，確定されることになる(2)。

(1)　A.E. バーシェイ『近代日本の社会科学』，NTT出版，2007年，289ページ。

(2)　後藤康夫「再生産論の具体化における媒介項をめぐって―N・N・N論文が提起するもの―」『商学論集』第60

こうして，軍封という特殊構成なるものは，近代的大工業という普遍的なるものが，この日本を資本主義として，また同時に帝国主義として確立させ，そこを貫く生きた具体的な姿にほかならない。「世界史的連繋」なる表現は，これを示すものである。まことに「普遍主義的であると同程度に特殊主義的」と言うべきほかはない。

だが，こうした「普遍→特殊」関係は，その変革像となるや，あざやかに反転していく。

帝国主義世界戦争としての第一次大戦は，飛行機，戦車など新兵器水準の新たな生産力展開を促し，他方ロシアを2月革命から10月革命へのソヴィエト・連続革命の形を通して社会主義へ向わせる。ここに，世界史は「一般的危機」の名のもと，「本史」建設という人類史過渡期を開始する。新兵器水準照応する，この新たな生産力展開は，軍封構成に特有な転倒的ならびに低位・劣位の生産力日本にとって，第二段目の外からの至上命令となる。だが，このたびは致命的である。軍封構成という特殊構成は，新たな生産力展開，新たな普遍にとって，いまや制約・足かせに転化，みずからの変革を迫られる。

では，新たな生産力展開・普遍への道を切り拓く，この変革の主体はいったい誰なのか。もはや軍封構成自体の担い手ではありえず，軍封構成の資本が対極に産み落とし，成長させてきたプロレタリアート以外にはありえない。ここのところは，「対抗」把握として，周知のことであろう。が，念のため，しばし立ち入ってみよう。

「旋回基軸」のところで，「機構」の分析を通して，その人格的な担い手としての「日本ブルジョアジー」が，他方「労働力」の分析を通して，その人格的な担い手としての「プロレタリアート」が，それぞれ具体的な生きた姿において析出され，総対抗の基本陣形が勢ぞろいする。ここに，軍封確立を外から・上からの形で担った「旋回基軸」は，いまや軍封変革の主体形成を内から・下から担うものへ，あざやかに切り返される。そこから，この「プロレタリアート」が担う歴史的課題とその根拠が，「展望」として次のように打ち出されてくる。「『農奴制度の野蛮的』至酷の上に『過度労働の文明的』至酷を累加する」という「二重の至酷を意味するこの型制（軍封構成―引用者）は生産力の発達に対して桎梏化した。それは生産力の内の規定的な要素によって照明せられる。それがプロレタリアートである」[(3)] と。すなわち，「歴史の法則」を推進する生産力，この生産力の主体的な担い手としての「プロレタリアート」，である。こうした「対抗」と「展望」把握の特徴を整理してみよう。

なによりも特筆すべきは，「機構」といい，「労働力」といい，そして「生産力」といい，これら客観的なるものが，ことごとく，その人格的な担い手において，主体的に把握されること，一言にして「客体（構造）→主体」関係把握である。そして，軍封構成にありながら，限定・形容詞のまったくない「プロレタリアート」― 特殊を貫き徹る「生きた具体的な一般・普遍」― の検出，一言にして「特殊→普遍」関係把握，である。全体としてみれば，「普遍→特殊」関係は，「客体（構造）→主体」関係に媒介されて，「特殊→普遍」関係へと反転，切り返されていくことになる。こうした1930

巻第3号，1992年。後藤康夫「軍需品表式と生産力展開―再生産論の具体化における媒介項をめぐって(2)―」『商学論集』第70巻第4号，2002年。

(3) 山田盛太郎『日本資本主義分析―日本資本主義における再生産過程把握―』，岩波書店，1934年（岩波文庫版，1977年，214ページ）。

年代の変革像は，第二次世界大戦後，どんな展開を遂げていくことになるのであろうか。

2　変革像の戦後展開

(1)　媒介項（範疇規定）・ケネー「経済表」の揚棄　―内田義彦

戦後まもない1947年，山田盛太郎の「再生産表式と地代範疇」なる論文が，サブタイトル「日本経済再建の方式と農業改革の方向とをきめるための一基準」と付して公表される[(4)]。もともとのサブタイトル「資本主義の経済構造と農業形態」ということからして，媒介項研究と位置づけられるものであるが，折からの民主革命のさなか，「火文字」[(5)]となって，にわかに実践的な意義が問われてくることになる。真っ先に一石を投ずることになったのが，内田義彦と田添京二との共同討議として名高いN・N・N論文である。次のように，「生産力発展の担い手と対抗」が提起される。

「一つの理論が構成される場合には，そこに客観的条件＝素材を実践的に認識する主体としての階級の形成，これに立脚する視角の問題が決定的な重要性を持ってくる。客観的条件が理論的発展の根底を規定するとは，本来その意味なのだ。それゆえ，マルクスによるケネー揚棄の必然は，ケネー『経済表』を，彼の置かれた歴史的・客観的諸条件の十全的表現と認め，その条件のうちに安住せしめることにおいてではなく，まさにケネーのヴェルサイユ左派的視角からする歪められた表現のマルクス的視角（歴史的に最も進歩的な階級としてのプロレタリアートの視角）による暴露において，把握さるべきなのである。」[(6)]

ここで，階級形成の主体として，なによりも「実践的に認識する主体」，「視角の問題」が，決定的と言うのである。ケネー「経済表」に即して言えば，これは，古典的（ブルジョア指導）ブル・デモ革命の諸条件をブルジョア的に表現するものであって，そこには「小ブル農民の上向」しか映らず，「下層農民の動き＝原動力」が表現されえない。したがって，現下の民主革命を，「労農同盟によるブル・デモ革命」として主体的に担うには，ケネー「経済表」において「存在しないもの」として「無視された下層農民の動き＝原動力」を表示する，すなわち「農民層の分解をそのものとして開被する」レーニン「市場理論の表式」と「ふたつの途」理論の導入が必要となってくる ―。

こうした「生産力の担い手と対抗，そこにおけるマルクス・プロレタリアート視角の貫徹」という提起は，その後，内田義彦『経済学の生誕』において，次のように「結論的なかたち」でリフレーンされ，整理されてくる。

「理論を初発において規定するところの表象は何によって規定せられるのであろうか。そこに歴史的＝階級的実践の問題が生じてくるのである。…（略）…つまり，社会の変革過程において過程を主導するところの階級が，歴史的な推転過程を指導していく過程においてこの概念の固定と表象の科学的再生産が行われる…。

---

(4)　『山田盛太郎著作集』第三巻，岩波書店，1984年。

(5)　平田清明『経済科学の創造』，岩波書店，1965年，9ページ。

(6)　N・N・N「『市場の理論』と『地代範疇』の危機」『経済評論』，1949年3月・4月・6月号（『内田義彦著作集』第10巻，岩波書店，171-2ページ）。

古典派についてみよう。古典派の理論は封建制から資本制への推移のブルジョア的理論である。すなわち封建制の解体過程であらわれる無産階級の原動力を，この変革過程の歴史的指導者たるブルジョアジーがくみとりながら，それを指導してほかならぬ市民社会をつくりあげる過程で，そのための理論的な武器としてあらわれたものである。それは一方で封建的な世界像にも対立するし，他方この変革過程の原動力を形成する無産階級の世界像とも対立する。むしろわれわれはこの変革過程において，ブルジョアジーが原動力たる階級の力をくみとり利用しながら，それの独自要求をおしつぶすための理論的な武器として市民的科学が成立したことを，はっきりみとめなければならないであろう。それだからまた，この変革過程においてその原動力たる階級が把握したところの市民社会の創成期の矛盾が，ブルジョア科学としての古典経済学の範疇の固定化の段階において，さらにその体系化の段階においてとりあげられながら歪曲され，ついにはまったく見失われてゆくことを，また，これらの見失われた環が，のちにマルクス＝レーニンによって社会を前進せしめる力として，理論の中にはっきりととりあげてくることをみるであろう。」[7]

ここに，「ケネー経済表」楊棄をめぐる生産力展開・歴史変革の主体とその基本対抗，そしてこの実践主体による「歴史の科学」としての経済学の対抗が，明快に整理されている。念のため，少し立ち入っておこう。

最初に，『経済学の生誕』の性格を吟味してみよう。これが世に問われたのは，戦後民主革命の帰趨が定まり，軍封構成にかわる，戦後日本の方向と形態が整い始めることとなった 1950 年代の初頭という歴史的な時期であった。だからこそ，こうした歴史的課題を内田自身が「生きた表象」として繰り返し念を押している —「スミスの積極面の評価は…（略）…むしろ，日本においてスミス的なものが（あるいは前スミス的なもののスミス的解決への方向づけが）出てくる可能性が十二分にあるが故に，それとたたかわねばならぬとかんがえているためであるということを，はじめにハッキリいっておきたい。」[8] — のであり，『生誕』こそは，「市民的科学」（スミス）の再構成の形をとった，「下からの途」（マルクス＝レーニン）視角からの，日本資本主義批判の書にほかならない。「イギリス経験論をのりこえる」主体の形成，である。

これに対し，日本の戦後重化学工業が本格的に展開する 1960 年代半ばに刊行された『資本論の世界』では，「ブルジョア科学によって歪曲され，見失われた環」を取り上げ，これを「下からの途」（マルクス＝レーニン）視角から「社会を前進せしめる力」として発見・展開することを通して，「人間解放の理論」という本来的な性格が解明されている。そこでは，変革の客観的条件としての「機械と大工業」がもつきわめて革命的な性格と，変革主体としての「全面的に発達した個人」の成長プロセス，これらが，「相対的剰余価値の論理」（生産力史観と階級闘争史観との揚棄）においてダイナミックに検出される。山田『分析』変革像では，「特殊を貫く生きた具体的な一般・普遍」ということで，プロレタリアートのなかでも熟練工としての旋盤工に「最も透視のきく」役割が与えられていたが，日本重化学工業の戦後段階を「生きた表象」とするこの作品に至って，「透視のきく労働力」としてのプロレタリアート像が，「全面的に発達した個人」という規定において生き生きと描

(7) 内田義彦『経済学の生誕』，未来社，1952 年（増補版 1962 年，44-6 ページ）。

(8) 同上，16-7 ページ。

き出されることとなった。そのさい，1966年の第1刷りにはなく[9]，その後，挿入されることとなった一句，「この点は，社会主義を考える上に重要です」は，まことに象徴的である。

(2)　媒介項（段階規定）・レーニン『帝国主義論』（ローザ軍需品表式）の新展開 ― 南克己

今度は，山田『分析』のもうひとつの媒介項である段階規定のレーニン『帝国主義論』を，「冷戦帝国主義論」として新展開している南克己（1977年刊行の山田『分析』文庫版での「解説」執筆者）をみてみよう。南は，「大陸的国家」米ソによる冷戦のグローバルな対抗を把握するさい，近代的大工業をはるかに超えるあらたな生産力展開に決定的な役割を与える。すなわち，冷戦帝国主義アメリカが，核軍事力の生産力的源泉として抱え込むことになった20世紀科学革命は，資本主義最後の統一的世界編成たる戦後冷戦体制をいまや現実に解体へと起動づけるとともに，みずからの成育基盤ともなってきた軍事への「埋没」から抜け出て，ME･情報革命の展開として「インターネット新世界」をつくりだしてきた。そこでは，マルクスのいわゆる科学的労働（Allgemeine Arbeit）の，本来の生産力的ならびに社会的な性格（生産力の「機械と大工業」段階ならびに私的所有・資本と民族国家の狭い限界をはるかに超える世界）が包蔵され，公開と共有，自律と分散，という原則的にあらたな編成原理で枠組まれる将来社会が「独自にNet的な生産様式」という形において先行的に実現されてくる。さらには，この新しい世界の編成原理に照応する社会運動もグローバルに展開し，そこから「Net･コミュニケーションのインターナショナル」も展望されるに至る（南のいわゆる「20世紀末大旋回」･「人類史的過渡期の開始」論。新しい世界，新しい主体。）[10]。

だが，こうした「資本主義世界最後の砦アメリカの崩壊とあらたな人類史的過渡期の開始」が日を追って本格化してくる「ポスト冷戦」ここ20年を，「第二の敗戦」，「失われた10年」から，さらに「滅びの10年」へとたどる日本は，どんな問題をはらんでいることになるのか。南は上記「Net新世界」論への「追記」として，そこで論じた情報革命一般のレヴェル（本流と逆流の対抗）には解消しえない，また，してはならない特殊日本的な問題の所在とその根源を，次のように注記する。

「この国の場合，逆説的だが，冷戦終結と『Netの発見』こそが逆に過去の歴史の全問題を明るみにだす，つまり1868年，1945年をつうじて積み残し，積み上げてきた歴史の課題［日本資本主義の『軍事的＝半封建的』→『冷戦植民地的＝格差系列的』『型制』の揚棄 ―　一時は必ず忘却されむしろ裏返しの表現（“Only Yesterday”のJapan as No. 1の大合唱を想起）をとって罷り通る日本的『古層』のあの野蛮で専制的，卑屈で安易な『近代的』形相の総決算の課題］を一挙に，まさに全機構的な問題としてクローズ･アップし（但しまたかの裏返しの表現の再版として ― まさに『植民地的』なアメリカ猿真似の，より正確にはアメリカ指令の『構造改革』の大合唱→全機構的破滅への道），またその破滅の『煉獄』を通してはじめて，かの歴史の課題の同時＝最終的で世界的＝人類史的な総決算＝解決への途を準備し促迫するに至るのだ（3度目の正念場 ― 歴史の

(9)　内田義彦『資本論の世界』，岩波新書，1966年，159ページ。

(10)　後藤康夫「戦後生産力の独自な性格―情報革命とグローバリゼーションへの展望―」福島大学国際経済研究会編『21世紀世界経済の展望』，八朔社，2004年。後藤康夫「ポスト冷戦の段階規定と21世紀型危機―南克己『ネット・マルクス論』に寄せて―」基礎経済科学研究所『経済科学通信』第107号，2005年。

弁証法)，というべきでもあろうが。」[11]

クローズ・アップされてくるのは，「全機構的な問題」としての，「積み残し，積み上げてきた歴史の課題」，つまりは「日本的『古層』の『近代的』形相の総決算」に他ならない，と。ここで，大いに興味を引くのは，「全機構的破滅」という現状規定，そして「過去の歴史の全問題」の根源に据えられている，丸山真男言うところの「日本的『古層』」という規定，である。これらは，主体の欠如，不在を意味するのであろうか。だとすれば，戦前とは様相を一変したかに見える，日本の戦後重化学工業段階なるものの特質が，あらためて問われねばなるまい。戦後重化学工業が，またまた，外から・上から，このたびは冷戦体制構築という「至上命令」にあわせて移植・創出されたことの深刻さについて，南は，冷戦アメリカが崩れ始めた 1970 年代半ば，山田『分析』，そしてグラムシのアジア社会論を念頭に，すでに次のように触れていた。

「戦後の日本に奉られる《日本株式会社》また《notorius MITI》等々類似の称号が，この国の戦後の上述のような非自立性と国家依存性［またむろんそれ故に倍加される超文明的と野蛮的との二重至酷労働（コンピュータのテンポにあわせられた『一億の働き蜂』）と二重に掠奪的＝帝国主義的な対外商業進出］の別名にほかならぬこと，…（略）…明らかである…。要するに，西方では国家の背後になお抜くべき頑強な砦『市民社会』が控えているが『東方では国家がすべてであり市民社会は幼稚でゼラチン状のものであった』（グラムシ『新君主論』）というかつての状況，それを清算する方向にはこの国の戦後の資本主義的発展は進みえなかった，のである（『高度に発展した資本主義』国日本の観念の陥穽）。」[12]

戦後の「冷戦植民地的＝格差系列的」構成にあっては，その発展なるものは，「市民社会は幼稚なゼラチン状」というかつての状況を清算しえず，主体は「超文明的と野蛮との二重至酷労働（コンピュータのテンポにあわせられた『一億の働き蜂』）」を余儀なくされるほかない。まさに，個の欠如，そのものである。それゆえ，「全機構的破滅」のいまこそ，戦後日本の出発点，「中断を余儀なくされた戦後民主革命」にまで立ち返り，その性格が「再審」されねばならない。南はその同じ論文において「主体の側に刻まれた問題」という，鋭い指摘もしていた。

「問題はさらに，これら（敗戦と戦後変革をめぐる－引用者）の全関連＝全対抗の集約点がもはや破産し度を失った旧所有者と『解放』勢力とのあいだの対抗ではなく，ほどなく『冷戦』体制の構築へと転じていく占領勢力と皮肉にもそれによって『解放』されることとなった勢力とのあいだとの対決へと推転し収斂してゆかざるをえなかった，という点にある。そしてそのことがこの変革の『方向と形態』を制約し，つまりはこの変革の歴史的限界を規定したという点にある（占領者の手で政策的に『解放』されねばならなかった変革主体の歴史的制約のことも含めて―ちなみに軍封支配の歴史的意味が問われるのはむろん，資本の問題として以上に，終局的にはこの国の主体の側に刻まれた問題としてである…）。…以上要するに，『上からの』力が『下からの』力と闘い，それを圧倒したのではない。『外からの』の力が『下からの』の力を押しつぶし，それに

(11) 南克己「情報革命の歴史的位相―インターネットの生成史に照らして―」ポスト冷戦研究会報告レジュメ（増補改訂版），2002 年，9 ページ。

(12) 南克己「戦後重化学工業の歴史的地位―旧軍封構成および戦後＝『冷戦』体制との連繋―」『新マルクス経済学講座』第 5 巻，有斐閣，1976 年，84 ページ。

『上からの』形を，然り形態だけを，付与したのである。それが問題の要点である。」[13]

こうして，山田『分析』の変革像に戻ってくることになるが，今度は主体の「歴史具体的な限界・制約」という規定において，である。そこでは，「日本的『古層』」，その背後に横たわる「『アジア的』基層社会」の問題が問われてくることになろうが，そのさいの議論の方向については，バーシェイによる丸山への，「古層」といった用語での表現は「政治的主体性」の裏返しの表現以上のものではない，という論評が示唆的である。すなわち。

「まことに丸山が意識の古い『深部』へと回帰するのを決定づけたものは，世界史的過程としての民主主義革命への彼の持続的な関心であり…（略）…丸山が引き出した隠れた連続性は，それ自体として意味があるというよりは，…革命的変革という点で，意味があるのである。『特殊』には『普遍』が，静止には運動が，『現実』にはユートピアが意味を付与したのである。」[14]

この「世界史的過程としての民主主義革命」という方向に倣って言えば，今後の議論の方向とそこにおける基本問題は次のようになろう。南は，上記「ネット新世界」論をしめくくるにあたって，「あらたな人類史的過渡期」を切り拓く主体の展望に触れ，「Linux」や「Napster」の先進事業や，「シアトルの闘い」が予告した「主体の革命」とも言うべきあらたな「社会的個体」（マルクス『要綱』）を「生きた表象」に，次のように提起する。

「この Net 上にあらわれるあらたな歴史的主体（諸個人）の評価，位置づけが，遠くは歴史に登場する “Individuals” の役割との関連で（『古典古代の最盛期』→階級社会形成と『近代の初頭』→階級社会の完成・国家の諸類型化の二つの場合との対比），近くは《18 世紀末大旋回》（イギリス産業革命―引用者）以来の『近代プロレタリア』の世界史的事業（階級社会と国家との止揚）とのかかわりで，主題追求の全行程を通して問い続けられるべき基本問題を構成する。」[15]

おわりに

バーシェイ『近代日本の社会科学』の日本語版序文では，あらたに大塚久雄と内田義彦『資本論の世界』が言及されている。今後，山田盛太郎の戦後の仕事まで含めて検討され，是非，増補版を出されることを願って，この小論を終えることとする。

---

(13) 同上，41-2 ページ。

(14) A.E. バーシェイ，前掲書，296 ページ。

(15) 南克己「情報革命の歴史的位相」，8 ページ。ちなみに，こうした方向については，すでに，たとえば，山田盛太郎の「構造論」と大塚久雄の「構造を支え，変革する人間主体・類型論」の統一的把握という方法，「真にグローバルな普遍的原理に立脚した『日本型』社会」の形成，そしてかつての「日本産業革命と戦争」ではなくあらたな「日本情報革命と平和」というシナリオの構想と実行，という課題が提起（石井寛治『日本の産業革命―日清・日露戦争から考える』，朝日選書，1997 年）されており，今後の議論が大いに期待される。